



カリブ海のキュラソー島

私はキュラソーという地名を聞いたのは、イスラエル旅行を一緒に楽しみ、友人となった方からです。彼女は、ピースボートでそこへ行かれ、キュラソーでリキュールを買われ、一緒にと誘ってくださっているので、感激がさらにこみあげてきたというわけです。キュラソーはカリブ海に位置するオランダ王国に属する島です。彼女はブログの「ピースボート体験記」に、キュラソーについて、このように記しています。

思いがけないことに、キュラソー（今回の寄港地の一つ）の話の中に杉原千畝さんの名前が出たのです。第二次世界大戦中、外交官だった杉原さんは政府の許可なしにビザを発行し、多くのユダヤ人を救った人物です。(2015. 5. 2)

杉原千畝氏は、彼の発給したビザが、多くのユダヤ人を救った「命のビザ」であったとして、記憶遺産の国内候補に選ばれたと9月25日の東京新聞に報じられました。

杉原千畝氏(1900-1986)は秀才の上、非常な努力家で、しかも独立独歩で道を切り開く人物であり、ロシア正教の信徒でもありました。彼は1939年にバルト三国の一つ、リトアニアの、日本人が一人も住んでいない町カナウスの領事館に領事代理として着任しました。彼の本当の任務はインテリジェンス、ドイツやロシアからの情報収集であったようです。着任直後に第二次世界大戦が始まりました。ナチス・ドイツのユダヤ人迫害、ソビエトのポーランド侵攻によるユダヤ人の追放によって、極東に向かう避難民が増えることが予想されました。難民受け入れの国際的道義は承知しながらも、三国同盟をもくろんでいた日本は、ユダヤ人の日本の本土ならびに各植民地への入国は好ましくないという通達を出していました。



杉原領事代理による手書きのビザ
(ウィキペディアより)

ナチス・ドイツにより祖国を蹂躪されたオランダ領事ズヴァルテンティクは、リトアニアに住むユダヤ系難民のために「偽キュラソービザ」、すなわち名目上の行き先「オランダ領地」への通過ビザを発行しました。難民があまりに多かったため、まだ開いていた日本領事館にも業務を依頼してきたのです。ユダヤ人迫害の実情を知っていた杉原千畝氏は予定もしていなかったビザ発行の業務を、苦悩の末、本省の訓命に反し、「**人道上、どうしても拒否できない**」という理由で、受給要件を満たしていない者に対しても独断で通過査証を発給したのです。

杉原夫人もこの決断を支え、協力されたとのこと。領事館が閉鎖されるまでの1か月余りの間に、記録では2139通、そして記録のないビザをも手書きで発行したとのこと。戦後、命令違反のため辞職に追い込まれ、彼の功績は埋もれていました。没後15年の、2000年10月に、河野洋平外務大臣により、名誉回復と謝罪、また、賛辞が捧げられました。

自らの不利を承知のうえでも、人の命を守ろうと苦闘した人物にやっと光が当てられてきたのです。彼の名前と過去の業績を記憶の中に留めるだけでなく、彼の決断と実行を私たちも見習うべきだと思っています。現在も、シリア難民の報道が続いています。

キュラソーを友人は詳細にブログで紹介していますが、**エメラルドグリーン**の海、**オランダ色が強い美しい建物のある島**とのこと。また、**小学校で、スペイン語、オランダ語、英語、パピアメントの4言語を習う**そうで、国際色豊かな南国の島のような。彼女はここで、キュラソーと命名された**青いリキュール(オレンジの味)**を体験されたとのこと。杉原千畝氏とその重いけれども輝く決断と生涯に乾杯！